
クリスマスとトナカイ

赤47

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスとトナカイ

【Nコード】

N5413B

【作者名】

赤47

【あらすじ】

赤鼻のトナカイのルドルフの話。自分の赤い鼻によっていじめられているルドルフが、サンタクロースやトナカイたちとの関わりの中で、自分の道を見つけていく。ファンタジーな感じではない。

赤い鼻（前書き）

完全なフィクションなので、変なところは気にしないでください。

赤い鼻

僕の名前はルドルフ。代々サンタさんのソリを引く血統のトナカイだ。先祖はサンタクロースの元、聖ニコラス（セイント・ニコラス↓サンタクロース）の飼っていたトナカイ<ニコラスのトナカイ>だ。僕はこの血統をとっても誇りに思っている。なぜなら、このニコラスのトナカイの血統でなければ大サンタのそりを引けないからだ。

そもそもサンタクロースは一人じゃない。世界中にプレゼントを配るのだから一人じゃ無理だし、トナカイも出来ないよ。だから世界中にサンタクロースがいて、トナカイも世界中にいる。大サンタはそんなサンタクロース達をまとめている。世界中のサンタから尊敬され、世界中のトナカイから慕われている。その大サンタのソリを引ける血統に僕はいるのだ。

僕のお父さんも大サンタのソリ引きだった。今じゃ大サンタのソリ引きのトナカイは、ダッシャー、ダンサー、プランサー、ヴィクセン、コメット、キューピッド、ドンダー、ブリッツェンが有名だけど、「大角のダニエル」と言ったら知らないトナカイはいないくらいだ。ちなみにみんなニコラスのトナカイの子孫さ！

僕もお父さんみたいなトナカイになりたいくて、今はヨーロッパのある国のサンタクロースに仕えている。だけどいつも僕は他のトナカイから仲間はずれにされるんだ、それにサンタさんのソリにも混ぜてくれない：僕の鼻が他のトナカイと違って大きくて赤いから。

「おい！鼻にリンゴつけてるのがいるぞ！夕飯が待ちきれなくてつまみ食いか？食いしん坊だなルドルフは！！ハハハハハ！」

同い年のマックスだ。いつも彼はこうやって僕を馬鹿にするんだ。周りのみんなもいつもマックスと一緒に笑ってる。

前から立派な角としっかりした足、周りより一回り大きいリーダー

のシュタイナーがこっちに來た。

「ルドルフ、こんなところで遊んでるなら掃除でもしてこい！少しは役に立ったらどうなんだ？血統だけで残れているお坊ちゃんよ？お前なんか血統がなければとくに追い出されてるんだぞ。」

彼は僕の血統について異常に嫉妬をしている。きっと彼ぐらいのトナカイなら血統さえあれば大サンタの下に仕えたかもしれない。彼が一番欲しいのは僕のこの血統だろう、そしてこんな僕がこの血統を持っていることが悔しいに違いない。

「はい。」

群れの中でリーダーはサンタクロースの次に絶対だ。僕は落ち込みながらも、血統は僕に与えられたいつか使えるチャンスだと信じ、血統だけは恨まないようにしていた。

最近は雑用の仕事が多くて休む暇も無い。それはサンタクロースに仕えるトナカイが減っているからなんだ。

サンタクロースというのは、聖ニコラスがキリスト教の聖人だったのもあって、カトリック教会の保護を受けている。大サンタのいるサンタ府はヴァチカンのローマ法王の外郭で、法王庁から長い間莫大な資金援助を受けていた。でも近世になって、中世の時のような法王の強大な権力は衰えていった。しかもそれに加えて世界を巻き込んだ2回の大きな戦争のせいで、法王庁はお金のやりくりに困ってしまったんだ。それで仕方なく法王庁はサンタ府への援助を減らすことになった。

それに権威が下がる一方のヴァチカンは、昔の教会主義みたいなことまで言い出したんだ。サンタクロースがプレゼントをあげるのは、従順なカトリック教徒で、親が教会に対して一定以上のお布施を払った子供だけにする。サンタ府は反対したけど、援助がないとサンタすら出来なくなっちゃうから、しょうがなく従ったんだ。そこでサンタクロースが不要になった地域からのサンタの撤退、資金繰りの為の人員とトナカイの削減。その結果が僕に仕事を増やした

んだ。

「掃除って言ってももう終わっちゃったんだよなあ…」

僕は一通りの仕事を済ませ、休憩しようとしていたところだったのに気づいた。

「戻ろうかな？でもマックスもリーダーもいるんだろうな…」

僕はしばらく、近づいてきたクリスマスに向けてトレーニングをしているトナカイ達を眺めていた。

僕はいつになればサンタさんのソリを引けるのだろうか？去年やっと留守番から、荷物ソリを引くことが出来た。荷物ソリはとても大変だったけど、僕のサンタソリへの憧れを強くした。

「ルドルフ、今暇か？」

「あ、はい。今は何も…」

突然の声に少し驚いたけど、その声は優しく耳に響いた。フランツさんだ。フランツさんはトナカイの中で、唯一僕を馬鹿にした態度で接することをしなかった。僕はフランツさんが好きだった。

「悪いんだけど、このリストをサンタさんのところへ持って行ってくれないか？今年のプレゼントを配る子供達のリストなんだ。」

「わかりました、僕が届けます。」

「ありがとう、じゃあ頼んだよ。」

フランツさんのありがとうがとっても嬉しかった。いつもフランツさんと話すのはどんな話でも、とても楽しい。

僕はリストを持って、サンタさんのところへ行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5413b/>

クリスマスとトナカイ

2010年10月11日02時49分発行